

#### 第4節 委員会の設置

本計画の策定に当たっては市関係部課長で組織する『島田宿大井川川越遺跡整備基本計画策定委員会』を設置し、整備計画策定のための基本方針等を検討した。また、学識経験者や地元代表者、市関係幹部職員で構成する『島田市島田宿大井川川越遺跡整備委員会』を設置し、整備計画策定への指導をいただいた。

#### 島田宿大井川川越遺跡整備基本構想策定委員会

##### ○策定委員

鈴木 将未	市長戦略部長	平成29・30年度
北川 雅之	産業観光部長	平成29年度
谷河 範夫	産業観光部長	平成30年度
大村 彰	都市基盤部長	平成29年度
三浦 洋市	都市基盤部長	平成30年度
北川 博美	行政経営部長	平成29・30年度
畑 活年	教育部長	平成29・30年度

##### ○幹事

田中 義臣	市長戦略部戦略推進課長	平成29年度
駒形 進也	市長戦略部戦略推進課長	平成30年度
菊池 智博	産業観光部商工課長	平成29・30年度
三浦 洋市	産業観光部観光課長	平成29年度
佐藤 修	産業観光部観光課長	平成30年度
杉本 隆良	都市基盤部都市政策課長	平成29年度
大畑 和弘	都市基盤部都市政策課長	平成30年度
鈴木 明宏	行政経営部財政課長	平成29年度
前島 秀基	行政経営部財政課長	平成30年度
中村 正昭	教育部文化課長	平成29年度
太田 直樹	教育部文化課長	平成30年度

#### 島田市島田宿大井川川越遺跡整備委員会

##### ○整備委員

渡辺 和敏	愛知大学名誉教授（委員長）	平成29・30年度
高瀬 要一	独立行政法人奈良文化財研究所名誉研究員（副委員長）	平成29・30年度
建部 恭宣	元静岡県文化財保護審議会会長	平成29・30年度
海道 清信	名城大学都市情報学部教授	平成29・30年度
荒井完治郎	島田市文化財保護審議会会長	平成29・30年度
松井 三宜	河原町代表	平成29・30年度
畑 活年	教育部長	平成29・30年度

○臨時委員

佐藤 正知	元文化庁文化財部記念物課主任調査官	平成30年度
北川 雅之	市産業観光部長	平成29年度
谷河 範夫	市産業観光部長	平成30年度
大村 彰	市都市基盤部長	平成29年度
三浦 洋市	市都市基盤部長	平成30年度

○アドバイザー

佐藤 正知	文化庁文化財部記念物課主任調査官	平成29年度
五島 昌也	文化庁文化財部記念物課調査官	平成29・30年度
山田 啓子	静岡県教育委員会文化財保護課文化財管理班主査	平成29・30年度



島田宿大井川川越遺跡整備委員会

○事務局

中村 正昭	市教育委員会文化課長兼博物館長	平成29年度
太田 直樹	市教育委員会文化課長兼博物館長	平成30年度
増田 智	市教育委員会文化課文化財課長補佐	平成29・30年度
朝比奈太郎	市教育委員会文化課主任学芸員	平成29・30年度
篠ヶ谷路人	市教育委員会文化課主任学芸員	平成29・30年度
望月 伸嘉	市教育委員会文化課主査	平成29・30年度
川島 綾子	市教育委員会文化課嘱託員	平成29年度
内田 絵美	市教育委員会文化課嘱託員	平成30年度

### 第 5 節 計画策定の対象範囲

本計画は川越遺跡を中心に大井川河川敷を含む島田市河原一丁目、二丁目を対象範囲とする。

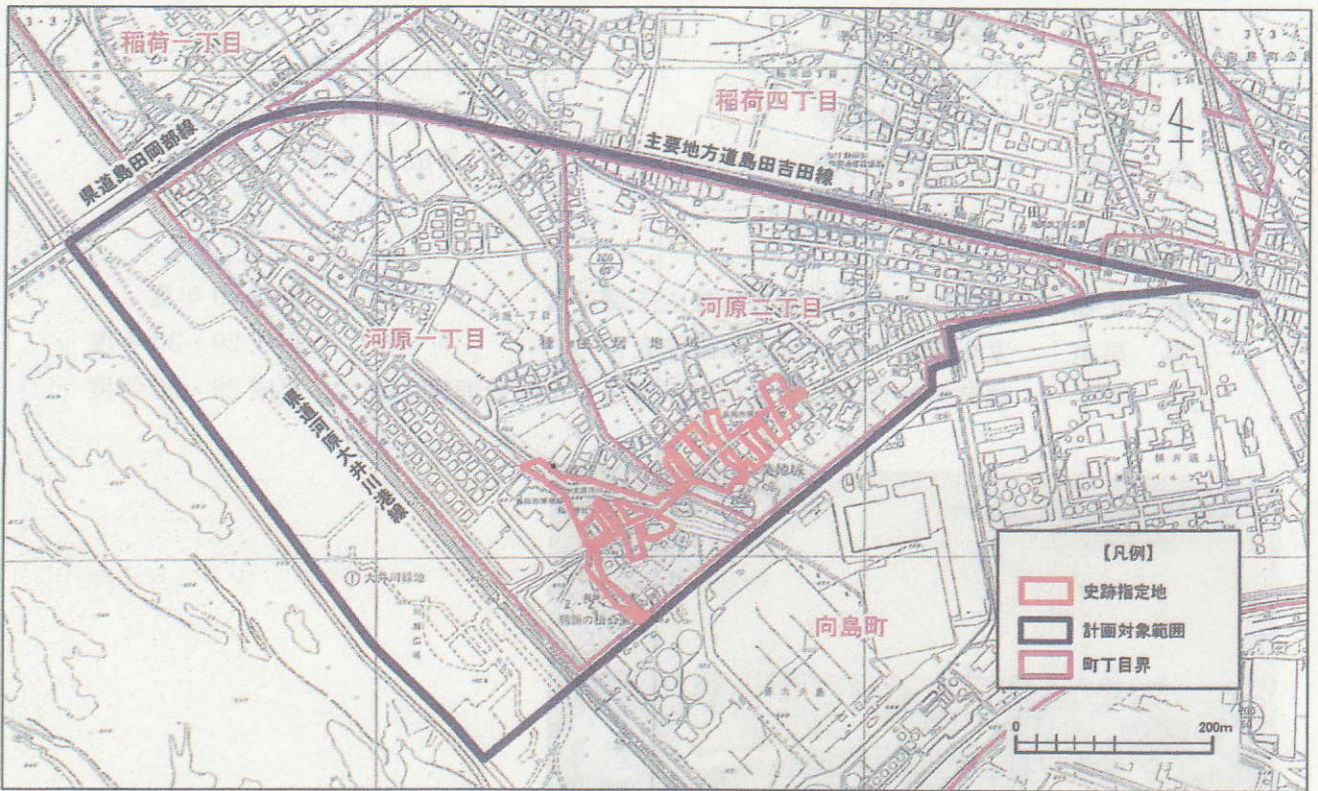


図 2 計画対象範囲図

## 第 2 章 計画地の現状

### 第 1 節 自然的環境

#### 1 位置

島田市は静岡県のほぼ中央に位置し、南アルプスを源流とする大井川が激しく蛇行しながら市内を北から南へ流れている。市の北部には山林が広がり、川沿いの斜面では茶の栽培が盛んに行われている。南部の大井川右岸は大井川の氾濫原として金谷・初倉地区の平地が広がり、さらに太古の地殻変動によって大井川の河床が隆起してできた牧之原台地が南に向かって広がっている。大井川の左岸には扇状地が形成され、藤枝・焼津方面に向かって志太平野が広がっている。

川越遺跡は大井川の左岸、旧東海道と大井川の接点に位置し、河原一丁目、二丁目にまたがる街道約 270m とその両側の川越し関連の宅地や堤防跡が指定地となっている。



図 3 川越遺跡の位置

#### 2 気候

一年を通して温暖な気候に恵まれ、平均気温は 15℃程度で、最も気温の下がる 1 月から 2 月の平均気温も 5℃ほどと温かく、降雪は珍しい。

雨季は 6、7 月の梅雨と 9、10 月の台風シーズンで、冬季は雨が少なく乾燥し、大井川右岸の牧之原台地ではこの地方特有の「遠州の空っ風」と呼ばれる冷たく乾燥した強風が吹く。

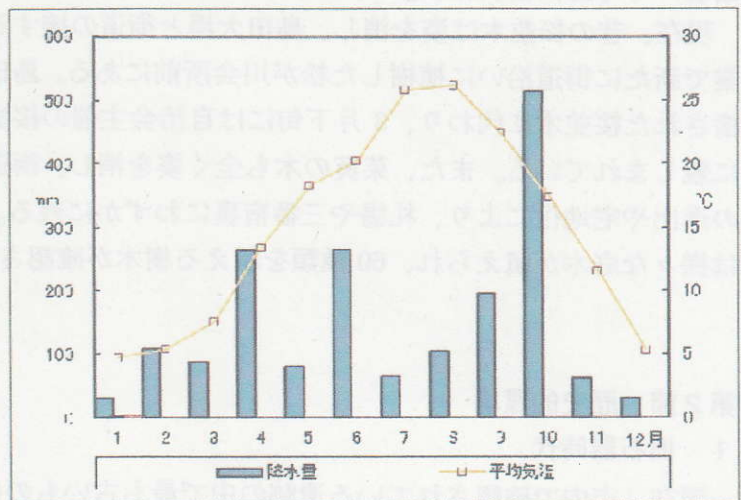


図 4 月別平均気温・降水量 (平成 28 年)

資料：島田市統計書 (平成 28 年度)

#### 3 地形・地質

遺跡周辺は大井川の氾濫原で、標高 65m 前後の平坦な土地である。浅井治平氏や大塚淑夫氏の研

究によれば、大井川の流路は「天正の瀬替え」以前は、牛尾山（駿河山）が相賀の山と尾根続きであったため、横岡から西に向かって流れた大井川は、A：志戸呂で牧之原台地に当たって流路を東に変え、向谷から伊太→旗指→野田→岸へと山伝いを通る流路と、B：志戸呂から二軒家へ牧之原台地の浸食崖沿いを通して河原→横井→高島方面を下る流路があったと考えられている。いずれも遺跡を含めた現在の島田の市街地の大部分は、かつて大井川の河道になったため、大井川の上流から運ばれてきた大量の丸い川原石や砂・砂利が混ざった砂礫層が厚く堆積している。

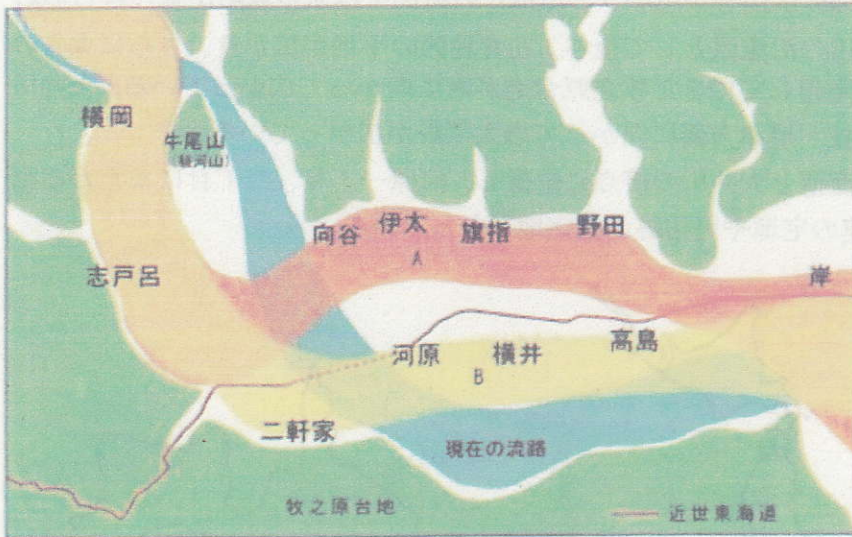


図5 大井川流路変遷図

大井川の氾濫を防ぐため、遺跡周辺では高土手（現在消滅）・島田大堤（桜堤防）・善太夫嶋堤（一部復元）堤防が南北に築かれ、最も西側に県道河原・大井川港線が走る第一堤防が造られている。この堤防の西側は川越広場と呼ばれる河川敷公園とマラソンコースが整備され、さらにその先に大井川の川原が広がり、平時は幾筋かに分かれて河水が流れているが、大雨になると満々と水をたたえた濁流の大河となる。

#### 4 植生

遺跡とその周辺の植生について、『東海道分間延絵図』（1806）や『駿河記』（1818）の挿絵など江戸時代の川越し場を描いた絵画には、島田大堤や街道の南北両側に松並木が植えられ、集落の周辺は田んぼの広がる様子が描かれている。また、元禄2年（1689）に書かれた『一目玉鉾』（井原西鶴著）や『島田宿明細帳』（享和3年（1803））などには茱萸が茂っていたことが記されている。

現在、昔の松並木は姿を消し、島田大堤と街道の接する場所に松が2本残るのみで、街道整備事業で新たに街道沿いに植樹した松が川会所前にある。島田大堤にあった松は戦後自治会によって植樹された桜並木に代わり、3月下旬には自治会主催の桜まつりが催され、お花見の名所として市民に親しまれている。また、茱萸の木も全く姿を消し、街道の南北両側に広がっていた田んぼも工場の進出や宅地化により、札場や三番宿裏にわずかに残る。なお、宅地の増加に伴って遺跡の周辺では様々な庭木が植えられ、60種類を超える樹木が確認されている。

### 第2節 歴史的環境

#### 1 旧石器時代

現在、市内で確認されている遺跡の中で最も古いものは、伊太地区にある①大鳥遺跡である。この遺跡からは、旧石器時代のナイフ形石器や尖頭器などが発見され、石器の形態からみて1万8千年前のものと考えられている。東日本では、石器を製作するとき縦長の剥片を素材として使用し、西日本では横長の剥片を使う。この遺跡からは横長の剥片が1点出土しており、すでにこの時代から東西の文化の交流があったことがうかがえる。

## 2 縄文時代

大井川右岸の②東鎌塚原遺跡<sup>ひがしかまつかばら</sup>では、全国で初めて平面の形が六角形の縄文時代中期の住居址を検出している。この時代は、一般的に円形の住居址がみられるが、五角形など多角形住居は信州地方の遺跡で多く検出されている。また、この遺跡からは、瀬戸内地方や渥美半島にみられる薄手の土器と長野・山梨県の厚手の土器が混在して出土していることから、大井川と駿河湾が接するこの地域は、大昔より東西・南北の文化が交流する地域であったことが推測される。

## 3 弥生時代

大陸から米作りが日本に伝わった弥生時代の遺跡は、市内では③旗指遺跡<sup>はつきし</sup>と④東山遺跡<sup>ひがしやま</sup>で弥生時代中期の住居址が見つかるほか、大津地区の⑤田ノ谷遺跡<sup>たのや</sup>では鉄鏃<sup>てつぞく</sup>が、⑥落合西遺跡<sup>おちあいにし</sup>で銅製の腕輪が発見され弥生時代後期の集落跡が確認されている。また、金谷地区の⑦横岡城遺跡<sup>よこおかじょう</sup>でも弥生時代後期の壺が発見されたほか、川根町家山地区の⑧天王山遺跡<sup>てんのうやま</sup>では後期の住居址が見つかる。弥生時代の方形周溝墓<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>の形態を持つ前期古墳である。

## 4 古墳時代

3世紀後半から7世紀にかけて島田市内でも多くの古墳が造られ、川根町家山地区では⑨天王山2号墳<sup>てんのうやま</sup>が築造されている。その後、前期から中期にかけて造られた⑩城山古墳<sup>じょうやま</sup>や⑪鳥羽見古墳<sup>とりばみ</sup>が確認されている。古墳時代後期になると市内の丘陵地帯に古墳が多数築かれ、その周囲に集落が形成された。特に初倉地区の谷口原や野田地区周辺の丘陵には数多くの古墳や集落跡が見つかる。

## 5 奈良・平安時代

7世紀後半から8世紀にかけて全国の街道が整備され、東海道は京より常陸国（茨城）まで整備された。当時の駅名を記した『延喜式』によれば、島田には遠江国初倉駅があったとされている。大井川右岸の牧之原台地東端には、『延喜式』に記された敬満神社<sup>けいまん</sup>が鎮座し、この神社西側の⑫宮上遺跡<sup>みやうえ</sup>では、奈良時代の住居址から「驛（駅）」と墨書された土器が出土した。隣接する⑬青木原遺跡<sup>あおきのへ</sup>でも円面硯が発見



「驛」の文字が書かれた墨書土器

されていることから、この付近に初倉駅があったと推定されている。10世紀中頃に書かれた『倭名類聚抄』<sup>わみょうるいじゅうしやう</sup>に「志太郡大津郷」の名が記載されており、11世紀中頃には伊勢神宮の荘園である「大津御厨」<sup>おおつのみくりや</sup>が置かれていた。この頃には、伊太地区で灰釉陶器の生産が行われ、静岡県内中・東部から神奈川西部など関東地方に向けて広範囲に流通していたことから、陶器の生産が御厨の貴重な財源であったことが想像される。

## 6 鎌倉・南北朝時代

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』<sup>あづまがたみ</sup>には建久元年(1190)12月に源頼朝が奥州征伐の帰途に宿泊した場所として「嶋田」の名が記されている。この嶋田は現在の野田地区の南にある元島田に想定されており、頼朝の宿泊地となったことを考えると、この時期にある程度の規模の集落があったとみてよい。また、貞応2年(1223)に書かれた『海道記』には京都からの旅人が播豆蔵<sup>はづくら</sup>の宿を過ぎ、大井川の浅瀬を渡り前島(藤枝)を経て藤枝の市に至ったことが記されている。

至徳2年(1385)11月15日の「足利義満御判御教書写」『今川家古文書写』には「駿河国大津庄」と記載されていることから、南北朝の内乱に御厨が解体し大津庄という地名になったことがうかがえる。観応3年(1352)8月、反足利尊氏派の佐竹兵庫助と駿河国守護今川範国の息子範氏が大津城で激しい争いを繰り広げた。この戦いに勝利した今川氏は大津に⑭慶寿寺を建立してこの地を拠点とし、駿河に進出する足掛かりとした。

## 7 室町・安土桃山時代

室町時代の大井川の渡渉について、永享4年(1432)に將軍足利義教の富士遊覧の様子を記した『富士紀行』や『覽富士記』では島田から播豆蔵の宿を通過したことが記されている。

戦国時代に三河・遠江・駿河の三国を治める東海随一の守護大名となった今川氏は、永禄3年(1560)に桶狭間の戦いで今川義元が討たれると一族は衰退し、武田信玄と徳川家康が駿河に攻め込み、島田は武田氏の支配下となった。天正3年(1575)5月、長篠の戦いで武田勝頼が織田・徳川の連合軍に敗れると8月には金谷の⑮諏訪原城も落城し、この地域の支配権力は武田から徳川に移っていった。

島田出身で今川氏に仕えた連歌師宗長が、駿府と都を往復する旅の途中で金谷に一泊したことを手記に記している。また、永禄10年(1567)に富士見物のため下向した里村紹巴は、金谷宿から島田へ渡る際に「大井川をわたす人」がいたと記し、後に川越人足となる渡渉を生業とする人々がすでにこの時期には存在していたことをうかがわせる。さらに、天正10年(1582)武田氏討伐の帰途に東海道を西進する織田信長の軍勢は島田(元島田)を通過して大井川を渡り、金谷に至ったことを『信長公記』は記している。

天正18年(1590)に豊臣秀吉が小田原征伐によって天下統一を果たすと、徳川家康は関東に国替となり、大井川右岸の金谷は山内一豊が支配し、左岸の島田は中村一氏が支配した。この頃行われた「天正の瀬替え」によって大井川の流路が変わり、島田・金谷の両岸に新たな平野が形成された。これにより島田の宿場も現在の本通付近に移ったと考えられる。

## 8 江戸時代

島田宿は田中藩領だった寛永と享保・元文期を除いて代官所(陣屋)が置かれ、幕末まで幕府領であった。慶長6年(1601)、徳川家康による宿駅制度が設けられると、島田宿においても本陣や旅籠、問屋場が整備された。慶長9年の大井川の大洪水で宿場が流され再び元島田に宿場が移るが、元和元年(1616)には現在の本通に戻り宿場が再建されていった。

参勤交代の諸大名や南地にある伊勢参り・物見遊山など街道を行き交う旅行者が増大するのにともない、元禄9年(1696)に島田代官が新たに川庄屋を任命し、川越業務に当たらせた。これ以後、川越制度の整備が



諏訪原城跡



島田大祭